



鹿児島県から得られた日本初記録のウミヘビ科魚類 *Brachysomophis longipinnis* ホサノキウミヘビ (新称) および本種の標徴の再整理

日比野友亮¹・伊東正英²・本村浩之³

Author & Article Info

¹ 北九州市立自然史・歴史博物館 (北九州市)
yusukeelology@gmail.com (corresponding author)
² 鹿児島県漁業協同組合笠沙町支所 (南さつま市)
³ 鹿児島大学総合研究博物館 (鹿児島市)

Received 23 June 2026
Revised 30 June 2026
Accepted 01 July 2026
Published 02 July 2026
DOI 10.34583/ichthy.69.0_9

Yusuke Hibino, Masahide Itou and Hiroyuki Motomura. 2026. First Japanese records of a snake eel, *Brachysomophis longipinnis* (Anguilliformes: Ophichthidae), from the west coast of Satsuma Peninsula, Kagoshima, with reassessment of the diagnosis of the species. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 69: 9–15.

Abstract

Two female specimens of *Brachysomophis* [1010 and 1141 mm total length (TL)] collected from Kasasa, western Satsuma Peninsula, Kagoshima, Japan, were identified as *Brachysomophis longipinnis* McCosker and Randall, 2001 in this study. The species has previously been recorded only from western Taiwan; therefore, the presently reported specimens represent the first occurrence in Japanese waters and the northernmost record of the species. Because *B. longipinnis* was originally described based on a single small holotype, the diagnosis of the species was herein redefined on the basis of additional large specimens by the following combination of characters: tail shorter than preanal length, 42.2–46.9% TL; head 11.5–13.8% TL; snout relatively long, 10.5–15.5% of head length (HL); pectoral fin moderate, 17.5–19.8% HL; cirri slender, not branched (relatively reduced and small in larger specimens); interorbital and top of head flat, notch on posterodorsal orbital absent; no remarkable pattern on body, narrow dark margin present on dorsal fin (relatively weak, entirely darker in larger specimens); toral vertebrae 124–130, mean vertebral formula 20/62/128. It is similar to *B. porphyreus* in the body coloration, the shape of head, and the size of pectoral fin. The former differs from the latter in the proportional length of tail (clearly shorter than preanal length vs. equal to longer than preanal length), the count of total vertebrae (124–130 vs. 137–148), the skin structure of the posterior region from supratemporal (numerous longitudinal wrinkles vs. no wrinkles, with numerous circular depressions), and the coloration of the margin of mandibular pores (no margin or not clear vs. prominent black margin present).

ウミヘビ科タツウミヘビ属 *Brachysomophis* Kaup, 1856 は東大西洋とインド・太平洋の温帯から熱帯域に分布し、これまでに7有効種が知られている (McCosker and Randall, 2001). 7有効種はいずれも浅海域に出現し、眼が突出し、上顎中央よりも前方に位置すること、吻が短く鈍いこと、両顎は長く、垂端位であること、下唇に多数の髭をもつこと、前鼻孔は短い皮質の管で、吻の側面かつ、吻端と眼の中央付近に位置すること、後鼻孔は上唇の縁辺かつ眼の前下方に開き皮弁で覆われること、歯は円錐歯で、顎歯は1または2列、鋤骨歯は犬歯状を呈し1列であること、鰓孔は側下方にあり、三日月状であることなどで特徴づけられる (McCosker and Randall, 2001; McCosker, 2022). 7有効種のうち、6種はインド・太平洋に分布しており、かつそのいずれもが北西太平洋域に出現する (McCosker and Randall, 2001). 国内ではモヨウタツウミヘビ *Brachysomophis cirrocheilos* (Bleeker, 1857), タツウミヘビ *Brachysomophis crocodilinus* (Bennett, 1833), ハワイタツウミヘビ *Brachysomophis henshawi* Jordan and Snyder, 1904, およびムラサキウミヘビ *Brachysomophis porphyreus* (Temminck and Schlegel, 1846) の4種が知られている (日比野・ざんくるす, 2025).

2022年までに鹿児島大学総合研究博物館に収蔵されていたタツウミヘビ属の標本を精査した結果、2006年に採集された日本産既知種と特徴の一致しない1標本が確認され、*Brachysomophis longipinnis* McCosker and Randall, 2001に同定された。さらに2024年には新たに本種に同定される標本が採集された。本種はこれまでタイプ産地である台湾以外からは記録されておらず (McCosker and Ho, 2014; Hibino, 2019), また本研究で得られた2標本は既報の標本よりも大きいことから、詳細な形態記載とともに報告する。

材料と方法

標本の観察および測定方法については概ね McCosker and Randall (2001) にしたがった。McCosker and Randall (2001) において snout to rictus として表記される値は、上



Fig. 1. Fresh after refrigeration (A) and alive condition just after captured (B) of *Brachysomophis longipinnis* (KAUM-I. 213250, 1141 mm TL, Kagoshima, Japan).

顎長ではなく、口裂の肉質部末端までの長さ判断し、そのように測定したうえで、別途吻端から主上顎骨後端までの長さも測定した。背鰭、臀鰭、および胸鰭軟条はそれぞれ総数を計数し、各鰭の軟条と脊椎骨の計数、および主上顎骨末端位置の確認については軟X線写真によった。標本の作製、登録、撮影、および固定方法は本村(2009)に準拠し、KAUM-I. 213250については採集後すぐに冷凍し、解凍後展縮して撮影した(2006年に採集された標本の作製方法も同様であった)。頭部の感覚管孔の観察のために、部分的にサイアニンブルーによる染色を施した。生殖腺の外見的な観察については、固定時に切開された右体側から

行った。全長は原則TL、頭長はHLと略記し、頭部の感覚管孔の用語および略記については日比野・木村(2020)に準じたが、上側頭感覚管孔については左右を含めた合計値として表記した。生鮮時の色彩の記載についてはKAUM-I. 1124とKAUM-I. 213250の生鮮標本写真[前者は小枝(2022)に掲載されている]と、KAUM-I. 213250の漁獲直後の写真に基づく。観察に用いた標本は鹿児島大学総合研究博物館(KAUM)、北九州市立自然史・歴史博物館(KMNH)、国立海洋生物博物館(NMMB、台湾)、および高雄科技大学(台湾)に保管されている。

Brachysomophis longipinnis* McCosker and Randall, 2001*ホサノキウミヘビ (新称)**

(Figs. 1, 2, 3A, B, 4; Table 1)

Brachysomophis longipinnis McCosker and Randall, 2001: 23, figs. 5E, 13 (type locality: Taiwan Bank, Taiwan Strait); McCosker and Ho, 2014: 96 (Ke-zi-liao, southwestern Taiwan); Hibino, 2019: 121, unnumbered fig. (Ke-zi-liao, southwestern Taiwan).

Brachysomophis sp.: Koeda, 2022: 28, unnumbered fig. (Satsuma Peninsula, Kagoshima, Japan).

標本 KAUM-I. 1124, 1010 mm TL, 雌, 鹿児島県南さつま市笠沙町片浦崎ノ山東側, 定置網, 水深 27 m, 2006 年 7 月 31 日, 伊東正英; KAUM-I. 213250, 1141 mm TL, 雌, 産地は KAUM-I. 1124 と同じ, 2024 年 9 月 24 日, 伊東正英.

記載 採集標本の計数・計測値を Table 1 に示した. 体は長くやや太く, 概ね円筒形で, 尾端部付近では側扁する. 体の太さは躯幹部では概ね一定で, 尾部ではわずかつ細くなり, 尾端部付近で急激に細くなり, 尾端部は尖る (Fig. 1). 肛門は全長の中央より明らかに後方に位置する. 体の全体に深く明瞭な縦皺が分布し (ただし, KAUM-I. 213250 では左体側のうち躯幹部中央のやや前方で皺が乱れて部分的に横向きになる), 尾部腹面の皺は臀鰭基部に

向かってやや斜走する.

頭は大きい. 頭部背縁は眼上方でやや隆起し, その後上側頭部にかけて大きく上昇する (Fig. 2). 吻は前端がやや尖り, わずかに上向する. 吻端は下顎前縁よりもわずかに前方に突出する. 眼は中庸で, 眼を覆う皮膜は楕円形; 眼の後端は上顎中央よりもはるか前方に位置し, 背側にわずかに突出する. 両眼間隔はやや広く, 吻長の 57.7–58.6% (Fig. 3A, B). KAUM-I. 1124 では, 吻端から眼隔域までの体表にきわめて浅い円形の小凹が疎らにあり, 眼後部から上側頭感覚管をわずかに越えるあたりまで, やや深い, 概ね円形の小凹が密に分布する. KAUM-I. 213250 では吻端から眼隔域まではほぼ平滑で, 眼隔域中央付近や吻の前鼻管上方付近にわずかに小凹が存在するにすぎないが, 眼後部から上側頭感覚管付近までやや深い小凹が密在し, 後方に向かうにつれて円形から横筋状に変化する. 眼の周囲には微小突起が分布する. 上唇後半には上方に向かって斜走する皺が多数ある. 下顎の縁辺付近には複数の縦皺があり, 下顎腹面全体に浅い円形から楕円形の小凹が分布する. 両唇には髭が分布する: 上唇については縁辺部に概ね 1 列をなした髭の列があるが, その大きさは多様で, 全体的に小さく, 疎らに存在する. さらに, その上方にも微小突起が不規則かつ疎らに存在する. 下唇では髭が縁辺部では概ね

Table 1. Counts and measurements of *Brachysomophis longipinnis*.

| | Present study | | McCosker and Randall (2001) |
|--------------------------------|------------------|-------------------|-----------------------------|
| | Japan (n = 2) | Taiwan (n = 4) | Holotype |
| Total length (mm) | 1010–1141 | 502–628 | 421 |
| As % of TL | | | |
| Head length (HL) | 13.5–13.8 | 11.7–13.0 | 11.5 |
| Trunk length | 40.9–41.3 | 40.0–46.0 | 43.1 |
| Tail length | 45.2–45.3 | 42.2–46.9 | 45.4 |
| Predorsal length | 22.0–23.9 | 18.9–20.2 | 18.1 |
| Body depth at gill opening | 5.1–5.4 | 3.5–4.0 | 3.7 |
| Body width at gill opening | 4.0–4.5 | 3.1–3.7 | 3.3 |
| Body depth at mid-anus | 4.4–4.8 | 2.9–4.1 | 3.3 |
| Body width at mid-anus | 4.0–4.4 | 2.8–3.8 | 3.1 |
| As % of HL | | | |
| Snout length | 14.9–15.5 | 12.2–12.5 | 10.5 |
| Eye diameter | 5.5–5.9 | 5.8–6.6 | 3.6 |
| Snout to rictus | 37.7–38.7 | 35.3–36.1 | 34.0 |
| Gill-opening length | 14.7–15.3 | 13.0–13.2 | 11.8 |
| Interorbital width | 8.6–9.1 | 7.8–8.5 | 8.9 |
| Isthmus width | 14.9–17.1 | 12.1–14.6 | 9.3 |
| Pectoral-fin length | 19.2–19.6 | 17.5–18.9 | 19.8 |
| Pectoral-fin base | 9.6–11.2 | 8.8–9.4 | — |
| Counts | | | |
| Lateral-line pores before anus | 61–66 | 59–61 | 68 |
| Predorsal vertebrae | 22–24 | 18–19* | 18 |
| Preanal vertebrae | 62–63 | 58–64* | 64 |
| Total vertebrae | 129–130 | 124–129* | 129 |
| Dorsal-fin rays | 281–282 | — | — |
| Anal-fin rays | 170–174 | — | — |
| Pectoral-fin rays | 9 | — | — |

*Based only on 2 specimens from McCosker and Ho (2014).

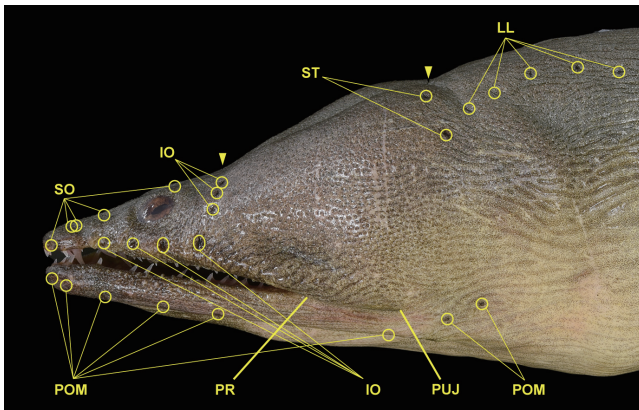


Fig. 2. Enlarged lateral view of head of *Brachysomophis longipinnis* (KAUM-I. 213250, 1141 mm TL, Kagoshima, Japan). IO, interorbital pores; LL, lateral-line pores; PR, posterior end of rictus; PUJ, posterior end of upper jaw; POM, preoperculo-mandibular pores; SO, supraorbital pores; ST, supratemporal pores. Arrows indicate interorbital (left) and mid-temporal (right) pores.

1 列に配列し、さらにより小さな微小突起が縁部周辺に比較的密に分布する。両顎の髭に分枝はないものの、一部の大きな髭の表面には微小突起が疎らに存在する。前鼻孔は管状で小さく、管は前横方向を向き、吻端よりもやや後方に位置する。後鼻孔は眼の前下方に位置し、開口部は皮弁で完全に覆われる。口はきわめて大きく、口裂および主上顎骨後端は眼後縁をはるかに越え、眼中央の口裂に対する位置は 45.1–45.2% で、吻端から主上顎骨後端までに対する位置は 33.0–33.3%。鰓嚢部は側縁から腹縁にかけてやや膨らみ、背面から腹面にかけての全体に深い縦皺があり、背側ではより密に分布する。鰓孔は大きく、体の側中から下方に弧状に開く。

頭部感覚管の開口部はきわめて小さく、視認しにくい (Fig. 2)。眼上感覚管孔 (SO) が 1+3 (ただし、KAUM-I. 213250 の左側では 1+4 で、眼上感覚管孔が前鼻孔上方付近に 2 個近接して存在する)、眼下感覚管孔 (IO) が 4+3、下顎-前鰓蓋感覚管孔 (POM) が 6+2 (ただし、KAUM-I. 1124 では下顎前端が摩耗しており、計数不能)、上側頭感覚管孔 (ST) が上側頭中央孔を含め 5 で、眼隔域後部に 1 開口部をもつ。体の側線はほぼ完全であるがきわめて視認が難しく、鰓嚢部に 8–10、背鰭前方に 21–23、肛門前方に 61–66 の感覚管孔をもち、尾部先端付近には口裂長と同程度の無管孔部がある。

歯はすべて先の尖った円錐歯で、やや間隔を空けて配列する (Fig. 4)。主上顎骨歯は外列と内列の 2 列からなり、両列は互いに大きく離れて独立する。外列、内列ともに歯は大きい、後端部付近ではやや小さい。外列歯は後鼻孔直下のわずかに後方から始まり、16–18 本で、前方ではやや後方に向かって湾曲するが、KAUM-I. 213250 の右側歯列では 4 番目のものが大きく後方に傾く。外列歯のうち、

後端付近の数本は上唇にほとんど埋もれて先端のみが露出しており、前方を向く。内列歯は 13–18 本で、KAUM-I. 213250 の左側歯列では 7, 12, 14, 16 番目、右側では 6, 11 番目の歯は後方に向いて倒れ、うちいくつかは完全に皮下に埋没する。下顎歯は 1 列で、14–16 本。鋤骨歯は前上顎骨歯に囲まれるような場所に位置から始まり、1 列で 14–15 本。KAUM-I. 213250 では 12, 13 番目の歯は完全に後方に倒れて皮下に埋没する。前上顎骨歯は他の歯に比べて明らかに小さく、口の前端に沿って 6–10 本が半円形に並ぶ。

背鰭の始部は胸鰭後端の直上よりもはるかに後方に位置する。背鰭の高さは臀鰭よりもやや低く、尾部中央付近に向けて次第に高くなり、その後ゆるやかに低くなる。臀鰭の高さは尾部前方でもっとも高くなり、その後ゆるやかに低くなる。胸鰭はやや角張った楕円形で、背側後端はやや尖る。

色彩 生鮮時 (Fig. 1) — 生時に比べ、死亡後はわずかに黒ずむ。体は黄みの弱い黄暗褐色で、いずれも腹側ではやや淡い。頭部の背面、吻、上顎周辺および下顎前端から下顎縁部周辺は灰褐色で、鰓嚢部ではくすんだ黄褐色。生時、頭部にはそばかす状の濃褐色点が散在するが死亡後は不明瞭。KAUM-I. 1124 では頭部側線感覚管孔に明瞭な縁取りはないが、KAUM-I. 213250 では、最終眼上感覚管孔と、眼下感覚管、前鰓蓋感覚管孔は広い黒色域で縁取られ、やや大きな黒色斑様をなし、上側頭感覚管孔、頭部の側線感覚管は狭い黒色域で縁取られるため小さな黒点様をなす。眼上感覚管孔の大半と下顎感覚管孔についても孔の周囲は地色と比べてやや濃いものの、明瞭な縁取りを形成しない。吻、鰓嚢部、上側頭部の感覚器は白色で点列状。背鰭は半透明の褐色で、縁部の色はやや濃いものの目立った縁取りがなく、基部は濃褐色。臀鰭は背鰭と同様の半透明な褐色だが、縁部には暗褐色の縁取りをもつ。胸鰭は基部付近では暗褐色で、縁部に向かうにつれて次第に濃暗灰色となる。

固定後 — 固定後はいずれの個体も色みがやや退色し、体は暗灰褐色で、腹側ではわずかに淡い。KAUM-I. 213250 の頭部感覚管孔の縁取りは固定後も残る。各鰭の色彩は概ね生鮮時と同様であるものの、体と同様に退色する。

分布 台湾海峡と鹿児島県薩摩半島の水深 27 m から約 50 m (McCosker and Randall, 2001; McCosker and Ho, 2014; Hibino, 2019; 本研究)。

備考 タツウミヘビ属 *Brachysomophis* は McCosker and Randall (2001) によって分類学的再検討が行われ、上述のとおり 7 有効種に整理されている。彼らが認めた 7 有効種のうち、日本にも分布するタツウミヘビ、ハワイタツウミヘビ、ムラサキウミヘビ、およびモヨウタツウミヘ

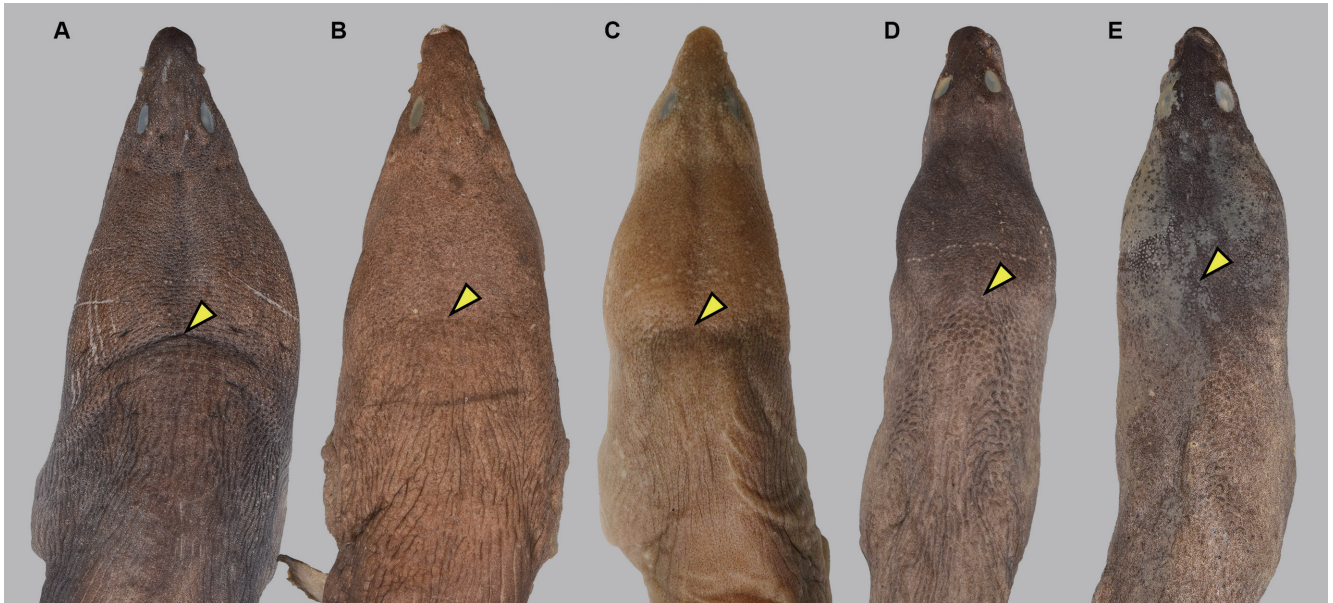


Fig. 3. Dorsal views of *Brachysomophis longipinnis* (A–C) and *B. porphyreus* (D, E). A, KAUM–I. 213250, 1141 mm TL, Kagoshima, Japan; B, KAUM–I. 1124, 1010 mm TL, Kagoshima, Japan; C, NMMB-P11136, 545 mm TL, Dong-gang, Taiwan; D, KAUM–I. 430, 1267 mm TL, Kagoshima, Japan; KMNH VR 100666, 1030 mm TL, Kanagawa, Japan. Arrows indicate mid-temporal pores.



Fig. 4. Teeth on maxilla, vomer, and premaxilla of *Brachysomophis longipinnis* (KAUM–I. 213250, 1141 mm TL, Kagoshima, Japan). Arrows indicate impacted teeth.

別の4種は4標本以上に基づいて再記載されている。一方、残りの3種は1または2標本のみに基づいて記載されており、種内の形態変異について十分な評価がなされているとは言い難い。*Brachysomophis longipinnis* は台湾海峡から採集された1標本に基づいて記載され、以下の識別的特徴によって定義された：尾部長は全長の45%；頭長は全長の11.5%；背鰭始部は胸鰭後端をはるかに越える；胸鰭はへら状を呈し、長さは中庸；吻は短く、眼中央は上顎のうち、前端から40%の位置にある；髭は細長く、分枝しない；眼隔域と頭頂部は平坦で、眼は背側に突出しない；頭部感覚管孔は小さいが基本的には視認でき、SOが1+3、IOが4+2、POMが5–6+2；歯は円錐歯で棘状、主上顎骨歯は2列で、下顎歯と鋤骨歯は1列；固定後の色彩は背側でわずかに濃く、腹側で淡く、各鰭は色素胞をもたないが、背鰭には細い暗色縁辺がある；脊椎骨数の組み合

わせは18/64/129 (McCosker and Randall, 2001)。その後、McCosker and Ho (2014) は台湾西部から新たに採集された2標本を報告し、いくつかの種内変異について報告した。今回、日本産標本を同定する過程で McCosker and Ho (2014) を確認したところ、McCosker and Ho (2014: table 1) に記載されたホロタイプの計測値の比のうち、頭長に対する比率がすべて本種の前記載と大きく異なっていた。これを踏まえて前記載に掲載されている *B. longipinnis* のホロタイプの写真 (McCosker and Randall, 2001: fig. 7) を確認した結果、McCosker and Ho (2014) の数値は明らかな誤りであることが判明した。さらに、table 1 において Trunk/TL として記載された数値は、実際には肛門前長を指すとみられる。したがって、McCosker and Ho (2014) で行われた、計測値の比率のホロタイプと台湾産2標本間の差異に関する議論の一切は信用に値しない。このような状況を踏まえて、本研究では彼らが測定した台湾産2標本を含む、台湾産の計4標本について、比較標本としての観察を行った。

今回観察した日本産2標本については、体に明瞭な斑紋をもたないこと、眼の後背方に欠刻をもたないこと、および両唇に明瞭な髭をもつことで、これまで日本国内から記録されている4種のいずれとも異なる。さらに、体に斑紋をもたないことで東大西洋に分布する *Brachysomophis atlanticus* Blache and Saldanha, 1972 と、眼の後背方に欠刻をもたないことでフィリピンとインドネシアから記載された *Brachysomophis umbonis* McCosker and Randall, 2001 と異なる。日本産2標本と *B. longipinnis* を比較すると、本属の種の識別に重要な頭背面の形状や髭、頭長に対する胸鰭長、全長に対する尾部長についてはホロタイプおよび台湾産の追加標本（以下、台湾産標本）との間に差異がみ

られない（ただし、髭については日本産2標本の方が相対的にやや小さい）（McCosker and Randall, 2001; McCosker, 2022; 本研究）（Table 1）。また、McCosker and Randall (2001) が *B. longipinnis* の識別的特徴として定義した形質のうち、全長に対する尾部長の比率、胸鰭長、髭の形態、眼隔域と頭頂部の形状、頭部感覚管孔の数、および歯の形態と列数、脊椎骨数については台湾産標本と明確な差異が認められないことから、日本産2標本を本種に同定した。日本産2標本は台湾産標本と比較すると、タツウミヘビ属の種の識別に重要とされる吻長の頭長に対する比率、体高の全長に対する比率に加えて、*B. longipinnis* の識別的特徴に含まれる頭長の全長に対する比率と背鰭始部の位置に関係する背鰭前長の全長に対する比率、さらには各部の体高および体幅の全長に対する比率、口裂長、鰓孔径、および鰓孔間幅の頭長に対する比率が明らかに大きく、その他の計測値の比率についてもわずかな差異が認められる（Table 1）。また、眼は背側にわずかに突出する点で、突出しないとされる *B. longipinnis* の形質とは異なる。背鰭前長については日本産2標本の背鰭前脊椎骨数が台湾産標本よりもわずかに多いことに起因するが、その他の差異については日本産2標本の全長が台湾産標本よりもはるかに大きい（1010–1141 mm TL vs. 421–635 mm TL）ことに起因するものであり、本種は成長にしたがって頭長、体高、吻長、口裂長、鰓孔径、鰓孔間幅が大きくなり、眼が次第に突出すると考えられる。McCosker and Randall (2001) は本種の眼中央が上顎の40%の位置にあるとしたが、実際にはこの上顎（upper jaw）は口裂に基づいており、日本産2標本および台湾産の追加標本では口裂に対する眼中央位置は40.0–41.8%で、上顎長、すなわち吻端から主上顎骨後端までに対する眼中央位置は30.9–35.1%であった。

これまでに採集、報告されていた本種の標本の最大長は635 mm TLで、雄であった（McCosker and Ho, 2014）が、日本産2標本はいずれも雌であり、比較的発達した生殖腺をもっていた。台湾産標本にはすべて背鰭縁辺に暗褐色の細い縁取りがあるが、日本産2標本ではむしろ背鰭全体が暗褐色で、縁辺の縁取りはやや不明瞭であった。このような差異が単に大きさによるちがいののか、あるいは成熟に伴う変化かは不明である。なお、本種のホロタイプでは臀鰭が淡色とされる一方、日本産2標本とホロタイプを除く台湾産4標本にはすべて暗褐色の縁取りがある。ただし、直接観察したホロタイプを除く台湾産4標本のうちの1個体（NMMB-P11136）ではきわめて淡い。

McCosker and Randall (2001) や McCosker and Ho (2014) は、本種はハワイタツウミヘビ *B. henshawi* にもっとも類似した形態をもつとし、これら両種の形態的差異について議論した。ところが、本種の色彩や、眼後背部に欠刻をもたないこと、比較的大きな胸鰭などの特徴はむしろムラサ

キウミヘビと類似する。本研究で改めて検討した結果、*B. longipinnis* はムラサキウミヘビと比較して、尾部が短く、肛門前長よりも明らかに短いこと（ムラサキウミヘビでは、ほぼ同長かより長い）、総脊椎骨数が124–130と少ないこと（137–148）、上側頭部の後方に密な縦皺をもつこと（縦皺はなく、円形の凹が密在する）（Fig. 3）、および下顎感覚管孔周辺の色相がいずれもほぼ体色と同じで、明確な黒い縁取りをもたないこと（明瞭な黒い縁取りがあり、黒点のように見える）によって区別されることが明らかとなった（McCosker and Randall, 2001; 本研究）。McCosker and Randall (2001) は全長334–1295 mmの4標本に基づいて *B. porphyreus* の識別的特徴を定義し、その中で大型の成魚個体には髭がないとしているが、今回観察した大型標本（KMNH VR 100667, 1360 mm+ TL）には痕跡的ながら両唇に沿う突起の列が認められた。*Brachysomophis longipinnis* とムラサキウミヘビは小型の個体については髭の状態にも差異があるものの（*B. longipinnis* では明瞭 vs. ムラサキウミヘビでは小さく不明瞭）、今回採集されたような大型の *B. longipinnis* では小型のものと比較して髭が相対的に小さく、退縮しており、少なくとも大型の個体については両種の識別に使用することが難しいと考えられる。また *B. longipinnis* はモヨウタツウミヘビとは体の斑の有無（もたない vs. もつ）によって容易に区別できるが、眼後背部に欠刻をもたないなどいくつかの頭部の特徴は両種で共通しており、頭部のみの中水写真による同定は困難と考えられる。

本種は McCosker and Randall (2001) において同属他種と眼下感覚管孔の数によって区別できるとされたが、実際にはこの形質には変異があり（McCosker and Ho, 2014; 本研究）、区別に有効ではない。背鰭前長についても多くの種と重複する。さらに、歯の形と列数については属内で概ね共通しているため、種の識別的特徴とは言えない。McCosker and Ho (2014) は台湾産2標本に基づいて *B. longipinnis* の生鮮時の色彩を報告し、その中で、鰓嚢部の側線感覚管孔が白点状である点で、これらが暗色であるハワイタツウミヘビと明瞭に異なるとしている。しかし、実際に標本を観察した結果、台湾産2標本についても側線感覚管孔は濃褐色であり、白点状のものは側線感覚管から独立した感覚器列であることが判明した。これらの色彩は固定後でもある程度視認できるほか、McCosker and Ho (2014: fig. 2, NMMB-P18063) から明らかである。また、この白点列状の模様はハワイタツウミヘビやモヨウタツウミヘビ、ムラサキウミヘビにも共通してみられ（McCosker and Randall, 2001; 本研究）、種の識別的特徴としては機能しない。これらを踏まえて本種の識別的特徴を再定義すると、以下ようになる：尾部長は肛門前長よりも短く、42.2–46.9% TL；頭長は11.5–13.8% TL；吻はやや長く、吻

長は 10.5–15.5% HL；胸鰭長は中庸で，17.5–19.8% HL；鬚は細長く，分枝しない（ただし大型の個体ではやや退縮し，小さい）；眼隔域と頭頂部は平坦で，眼後背部に欠刻がない；体に目立った斑紋がなく，背鰭には細い暗色縁辺がある（ただし，大型の個体では背鰭全体が暗色で，縁取りがやや不明瞭）；総脊椎骨数は 124–130 で，平均椎体数の組み合わせは 20/62/128。

本種のこれまでの採集記録は台湾西部に限定されていたことから，今回の 2 標本は本種の北限記録であり，かつ日本国内からの初記録である。本稿では鹿児島県産の 1 標本 (KAUM-I. 213250) を基準標本として，*B. longipinnis* の体表にみられる特徴的な縦皺と体色に因み，新標準和名ホサノキウミヘビを提唱する。ホサノキもしくはホサとは鹿児島県においてシイタケ栽培に使用される榎木用樹種の呼び名で，当地では一般にコナラ *Quercus serrata* もしくはクヌギ *Quercus acutissima* を指す。

比較標本 ホサノキウミヘビ *Brachysomophis longipinnis* (5 個体)：CAS 305681，ホロタイプ，421 mm TL，台湾堆，台湾海峡；NMMB-P11136，545 mm TL，NMMB-P33029，585 mm TL，台湾，東港；NMMB-P18063，635 mm TL，NMMB-P34296，502 mm TL，台湾高雄市蚵仔寮漁港。ムラサキウミヘビ (5 個体)：KAUM-I. 430，1267 mm TL，鹿児島県南さつま市；KMNH VR 100666，1030 mm TL，神奈川県三浦半島；KMNH VR 100667，1360 mm+ TL (尾部末端欠損)，大阪湾；NMMB-P24034，1303 mm TL，台湾嘉義県東石郷；高雄科技大学未登録標本 (フィールド番号：HCH240420-40)，488 mm TL，台湾高雄市蚵仔寮漁港。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり，Po-Na Lee 氏と Ming-Hua Chian 氏 (NMMB)，Hsuan-Ching Ho 氏と Yo Su 氏 (国立高雄科技大学)，および Yu-Chieh Hsu (国立中山大学) には比較標本観察の機会をいただいた。山田和彦氏 (観音崎

自然博物館) と木村祐貴氏 (地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所) には比較標本を提供いただいた。吉村風氏 (茨城女子短期大学) には柞にまつわる地方名についてご助言いただいた。Ichthy 編集委員の中村潤平氏と，匿名の査読者には本稿に対して適切な助言を賜った。この場を借りて厚く御礼申し上げる。本研究の一部はカリフォルニア科学アカデミー水生生物学研究基金，日本学術振興会科学研究費 (15J02820・20H03311・20K15593・21H03651・23K20304・24K02087・26K08936)，国立高雄科技大学研究助成金，および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業 (奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル) の支援を受けた。

引用文献

- Hibino, Y. 2019. Family Ophichthidae, pp. 118–154. In Koeda, K. and H.-C. Ho (eds.) Fishes of southern Taiwan. National Museum of Marine Biology & Aquarium, Pingtung.
- 日比野友亮・木村祐貴. 2020. 大阪湾から得られたフチナシウミヘビ *Ophichthus sangjuensis* (ウナギ目ウミヘビ科) の記録. 魚類学雑誌, 67: 111–115.
- 日比野友亮・ざんくるす. 2025. 日本産ウミヘビ科魚類図譜. 文彩堂, 東京. vii + 24 pls. + 35 pp.
- 小枝圭太. 2022. ウミヘビ科, pp. 27–30. 岩坪洗樹・伊東正英・山田守彦・本村浩之 (編) 薩摩半島沿岸の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 枕崎・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- McCosker, J. E. 2022. Family Ophichthidae, Snake-eels, sand-eels and worm-eels, pp. 101–137, pls. 16–20. In Heemstra, P. C., E. Heemstra, D. A. Ebert, W. Holleman and J. E. Randall (eds.) Coastal fishes of the western Indian Ocean. Vol. 2. South African Institute for Aquatic Biodiversity, Makhanda.
- McCosker, J. E. and H.-C. Ho. 2014. Redescription of the sharp-fanged snake eel *Brachysomophis longispinis* (Anguilliformes: Ophichthidae). *Platax*, 11: 95–101.
- McCosker, J. E. and J. E. Randall. 2001. Revision of the snake-eel genus *Brachysomophis* (Anguilliformes: Ophichthidae), with description of two new species and comments on the species of *Mystriophis*. *Indo-Pacific Fishes*, 33: 1–32.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.